

定本
坂口安吾全集

第二卷

宮本仙舟先生全集

第二卷

冬樹社

定本 坂口安吾全集 第二卷



昭和四十三年四月十月初版 第一刷发行

著者 坂 口 安 吾

発行者 滝 泰 三

印刷所 三容堂印刷株式会社

東京都千代田区神田錦町二ノ二

製本所 加藤三代治製本所

東京都新宿区早稲田鶴巻町三二番地

発行所 冬 樹 社

東京都千代田区九段南二の四の一四

電話東京(三六三)三四二一(大代表)

振替東京七五七七

定本 坂口安吾全集 第二卷

監修

石川 淳

河上徹太郎

小林 秀雄

獅子 文六

編纂

奥野 健男

檀 一雄

平野 謙

福田 恆存

題字

石川 淳

第二卷 目 次

吹雪物語

篠笹の陰の顔

イノチガケ

風人録

波子

島原の乱雑記

ラムネ氏のこと

古都

孤独閑談

真珠

居酒屋の聖人

五月の詩

二十一

鉄 砲

412

露 の 答

418

わが血を追う人々

425

朴水の婚礼

435

白 痴

447

外套と青空

468

解 説

奥野 健男

483

作 家 論

倉橋由美子

500

解 題

渡辺 肥田 彰
三

511

『吹雪物語』について

関井 光男

515

小

説

Ⅱ

吹雪物語

—夢と知性—

第一章

一九三×年のことである。新潟も変った。雪国の氣候の暗さは、真夏の明るい空の下でも、道路や、建築や、行き交う人々の表情の中に、なにがなし疲れの翳を澱ませて、ひそんでいる。そういう特殊な氣候の暗さや、疲れの翳が、もはや殆んど街の表情に見られないのだ。まず第一に舗装道路。表通りの商店街は、どの都市にもそっくり見かけるあたりまえの商店建築が立ちならび、壁面よりも硝子の多い軽快な洋風商店、ビルディング、ネオンサイン、酒場、同じことだ。築港の完成。満洲との新航路開通というこの市の特異な事情もあるけれども、変ったのは、あながちこの市まちの話だけではな

いらしい。歐洲で言えば、世界大戰を境にして、と言うところだが、日本では、恐らく関東大震災を境にして、と言うのである。日本中の都會の顔が、例外なしに變つたらしい。

青木卓一は久々に故郷へ戻りついた夜、叔父の田巻左門と大寺老人に案内されて、食事がてら街を歩いた。遠来の客をもてなすためというよりは、老来益々出不精で、夜街の賑いを忘れていた左門叔父の好奇心が強かった。三人はダンスホールへめぐりこんだ。これも亦東京と同じことだ。廻転する光の色が踊りにつれて變化する。違っているのは踊りての数が少いだけのことである。と、踊りに来合せていた幼馴染の一婦人が、卓一を認めて呼びかけた。その顔は卓一の記憶の底をつきまくり、ひっくりかえしても、雲をつきまわすと同じように、手掛りのないものだった。え、俺の幼馴染といえば仔豚が鴉のような薄汚い餓鬼ばかりじゃないか。誰がいっ

たいこんなバタ臭い麗人に変ったのだろうか？ 卓一は呆れかえって女の顔を視凝めつづけた。

「私の顔、思いだせないでしょう」女は笑った。「あしたの今頃この場所でもまた会いましょうね。お待ちしますわ」

女はくるりと振向いて行ってしまった。

「私はこういう艶っぽい場所が好きだ。芝居、ダンス、活動、待合。総じて人だまりと女のいる場所はみんないいね。一晚に一所ずつ、粹な場所で遊んでくらして、それからゆっくり寝るのさ。ほかに楽しみもないのですね」

と大寺老人は卓一にささやいた。そうして二十数貫の巨額をゆすぶりと、笑いだした。左門も大寺老人ももはや七十を越えていた。左門は瘦せ衰えていたが、珍奇な国の魅力のために、眼は生き生きと輝き、軽い上気がやつれた頬を若返らせているようだった。

「え、誰だ。さっきの婦人は。あれも踊り子のひとりかね？」と左門がきいた。

「僕も見当つかないのです。幼馴染だというのですが……」

卓一は久々に故郷へ帰った思いよりも、見知らぬ土地へ突きはなされた旅人のむせるような異国情趣をむしろ感じた。

「まるで変ったものでしょうが……」と大寺老人が左門に言った。

「まるで変ったね。然し、変るのがあたりまえだ」と左門は

自分の老齢を蔑むような苦笑をうかべた。「卓一。お前も踊ったらどうだ」

「生憎踊りを知らないのです。ダンスホールへはいったのが生れてこのかたこれが始めての経験なんです」

「東京で何をして暮してきたのだ。お前もやっぱり穴熊の一族か」

左門の眼は踊る人々を飽くこともなく追いつづけた。少年の好奇心に燃えた眼だ。なんて新鮮な眼付だろう、と卓一は思った。東京へ脱ぎすてきた耽溺の日々もただ退屈でしかなかった。旅も、旅愁も、退屈つづきの重苦しさの底にあった。故郷も、然し新鮮ではない。俺にはもはや少年がないのだ。

——この老人にこんな新鮮な少年の眼がどうして残っていたのだろうか……

それが再び彼に異国の思いを強めた。

「大寺老」と左門はよんだ。「あなたは時々ここへ遊びにきて、踊った例はないのかね？」

「さて、そこだね。長生きの耻かきとはこの理窟だ。いっぺんだけ踊ってみたことがありましたかね。（と老人は急に當時を思いだして、暫くは笑いがだらしなく止まらなかった）年寄りのくせに、豚のように太ってしまうと、赤んぼの足つきと同じようにヨチヨチして、器用なうごきはできない

ものだ。女の子が怒ったね。あははは。私はこうして見てい
るだけで、なんと言ったね。卓一さん。その、ホルモンとい
ったかね。そのたしになりますからね」

その翌日から卓一は越後新報へ出社した。卓一はこの新聞
の編輯長に招かれたのだ。前編輯長の野々宮が事務を教える
ために、出社していた。

「僕は始め人並みの抱負をもっていたのです。然し一年。恐
らく一カ月という方が、むしろ正しいかも知れません。抱負
は、すでに、なかったのですね」野々宮は笑った。卓一と同
じ年齢のころ、彼も招かれてきたのであった。「それから
は、ニュースを編輯するだけの仕事でした。地方新聞は青年
の野望と抱負を傾けても、齒の立ちがたい種類のものです。
抱負のうすれた毎日に、この土地の長い冬の暗らさほど、憂
鬱なものはありません。毎日低い灰色の空に押しつけられて
いると、気違いにならないことが、不思議な気すら起るので
すね。この薄暗らい編輯室に一日坐っているだけで、何か微
塵に破壊したくなるような、苛立ちを覚えずにいられなくな
ってくるのです」

野々宮は、やつれていた。肉体も虚弱であったが、神経衰
弱の気味だそう。東京に彼の赴任を待っている新たな仕

事があるのだが、恋のために、動けなかった。彼の細君は、
刃物を揮いそうだった。

「むしろ抱負が、この土地では、無役な障碍にしかすぎない
のです。地方新聞が、地方的な啓蒙の役割をもっていたの
は、明治中年の頃のこと、今日では、地方のニュースを伝
えるだけが、精一杯の仕事ですね。そのほかの大きな仕事は、
東京の大新聞がするのです。東京の大新聞が地方に販路をひ
らいて以来、どれだけ仕事をしてみても、すでに、信用がな
いのです。むしろ抱負が、誤解の理由になるだけでしょう。
この仕事で生きるためには、自分を殺すことですね。それだ
けが、自分を生かすことなのです」

野々宮の悲観的な述懐も、卓一の心を殆んど悲しませはし
なかった。この仕事は、彼にとっても、もともと息ぬきの心
算でしかなかったのだ。この仕事は、ずるずるべったり、一
生のものになるにしても、ままよ、一生が息ぬきだ。

「僕に抱負はないのです。生活が、ひとつの旅行にすぎない
のです。生活の変化、環境の変化。それを一途に考えてい
たのです。環境を変えさえすれば、すでに道がひらけている
理窟なのだ、と今も信じているのです。そして、流れてきた
のです。思い通りに仕事を運んだり、変化させようというの
ではなく、仕事の通りに自分を変え、順応しようというので
すね。阿呆のように暮らすつもりにはかかりません」

と、卓一は笑って言った。

然し希望の裏打ちのない若者の行為があり得ようか。むしろ有り得る筈はない。そして卓一にも、やっぱり希望はあるのであろう。然し絶望に変形しがちな、疲れきった希望に就いて語ることは、人性と謎に就いて語ることにほかならないのだ。この解きたい人性に就いて。自信の破壊。野望。そして成功のあこがれ。必死。けれども安らかな時間。第二の希望。等々。それはもう人性に訊ねるがいい。個人の知ったことではないのだ。卓一は心に叫ばずにはいられなかった。息ぬきだ。もはや俺の一生が。

然し卓一を故郷へ呼び寄せた心のひとつに、女の面影を消し去ることができなかった。彼はそれを意識したが、意識がそれにふれることを、余り好んでいなかった。

田巻左門に一男と三女があった。三女はそれぞれ他家へかたづき、一男は、結婚まもなく夭折した。子供はなかった。嫁の文子は、まだ若かった。恐らく三女のひとりから、養子をもらうべきだろう。そして文子は実家へ帰えすべきだった。然し左門は文子を手離す勇気がなかった。俺は、いよいよ、ひとりになる。……まるで棄てられてしまうような、切ない思いがするのであった。そして文子の人柄に、手離しがたい愛情を覚えざるを得ないのだ。むしろ文子に餌を探そう、左門は思った。そして甥の卓一をその候補者に選んだの

だ。それは左門の胸にかくした計画だった。卓一と文子はまったく知らないことだった。

折から越後新報が野々宮の後任を物色中のことを知ると、彼にゆかりの新聞のこととて、難なく甥を後釜にすすめることができたのだ。そして卓一は帰郷した。文子のことは知らないのだ。これだけでひとつは済んだ。次は自然にまかせることだ、と、左門は肚に思っていた。もし卓一が文子を好いたら、そして文子が卓一を好いたら、彼を養子に迎えよう。万事は自然のなりゆき次第だ。然し文子の温順な性質や、容貌の美しさを思うにつけて、自然にまかせておくことが、いつとなく二人を結ぶ同じ希望になることだと左門は思った。きっと自然にそうなるだろう。そういう安堵がわかるのである。とくにひどく落付いた、まるで落胆であるかのような、安堵を感じる思いがする。俺が口をだすことはない。誰が口をだしてもならぬ。自然が二人を結んでくれるに相違ないと思うのだった。いわば左門の胸底に、左門も知らない小さな嫉妬がかくされているせいかも知れない。そうしてやりたい反面に、そうさせたくない悲しい思いが、ひそかに燃えていることを想像してもいいのであった。

「え。卓一さん」三人が夜の散歩にでかけるとき、大寺老人が卓一に言った。「あの若い後家さん綺麗だと思わないかね。え。つやっぱいいね。水々しいという奴だ。俺が三十年若

かったら。いや。男子一生の大後悔さ。さて、そこだ。ここは一番、あんた、ひとつ口説くところだ。誰に遠慮がいるものか」

卓一は文字を見るのがその日はじめてのことだった。そして文字を見ているうちに、左門が自分を故郷へよんだ魂胆が、分りかけてきたのであった。この女と、やがて一緒にいるだろう。無気力な、ぬきさしならぬ予感のために暗らかった。

然し女。卓一を故郷へよんだ面影は。それは文字ではなかったのだ。

四年前のことだった。

卓一は古川澄江と知りあった。澄江も新潟をふるさとに持ち、ピアノの修業に没頭していた。人々は、二人の結婚を、信じていた。二人のひたむきな情熱によって、結婚だけが、当然のことと思われたのだ。

卓一は、然し自然に澄江から離れていった。まるで澄江に裏切られ、棄てられたような、深い嘆きに沈むのだった。然し澄江から離れて行くのは、卓一なのだ。澄江は愛しつづけていた。卓一もそれを知っていた。然し卓一の胸底を、常に裏切られた切なさ、去らなかつた。その切なさを、どうすることもできないのだ。次第に澄江から遠退くことに焦りだし、心は自然に荒みを深かめて、自暴自棄に落ちていた。

スタンダルは、メチルドに寄せる愛に就いて語ること、かなり好んでいたらしい。二人に肉体の関係はなかつた。彼がメチルドに会ったのは、その生涯の極めてわずかな時間のことだ。特に深く立ち入って、愛の告白を語り合った仲でもない。然し彼は失意のとき、また、そぞろ歩きのひとつとき、この恋を知りそめてのちの多くの時間は、メチルドの思い出によって豊かになり、救われもしたと言うのであった。その恋は、人の世にいれられないが、神の前に許されるであろう、と好みの誇大な表現で告白する。この愛すべき恋愛道の大家は、それゆえ甚だ常識的でもあるのである。彼は酔うことが好きなのだ。そして時代の精神が、恋の酔いをさませるほど、苛酷でなかつた。

まことの愛は、怖れのなかに、あるのだろうか。これも奇矯だ。然し愛情は甘くないのだ。また愛情は、肉体を超えて有りうるだろうか。むしろまことの愛情は、肉体を怖れることがないだろうか。これはどうも理解できない節がある。我々の精神内容には、あらゆる葛藤の歴史を暗けた複雑なからくりが隠されているのだ。精神は肉体を裏切り、肉体はまたその精神を裏切って、今更その源へ還ることは困難らしい。然しとかく人間は、聖母の姿を胸に秘めていやらしいものだ。愛の対象に、一つの神格を与えたくてしまいうらしい。これは純粋な恋ではない。渺くとも肉体のもとめる恋で

はないのである。いわば人生観的な、思想活動と結びついたり、極めて理論的な工作でもあらう。

「あのひとは、多情な女だ」

卓一は、人に向って、ときに浩嘆を洩らしたことがあったのである。然しその浩嘆ほど、彼の激しい切なさもなかったのだが、またそのことほど彼の信じえぬ事柄もなかった。

なるほど澄江に、かつて愛人があった。澄江に限ったことではない。卓一だって、くされ縁の女があった。どっちにしても、二人以前の、すでに過去の話であった。澄江の心は、一途に卓一のものだった。卓一はそれを知っていたが、自ら最も信じがたい事柄を擲んで、浩嘆せずにいられないのだ。言わざるを得ないのだ。嘆かざるを得ないのだった。

澄江の眼光に甘さはなかった。彼等は愛情のさなかに於てすら、貪婪に裸かの心を探りあい、己れの理知のうるささに、むしろ当惑するのであった。そんな恋の中にいると、まるで試験台にねせられて、手術を受けているような恐怖が去らないこともない。澄江も亦、同じ思いがするであろうと彼は思った。今に、いっとう怖ろしいことが、きそうだ。……

卓一は、ぬきさしのならない力にせめられて、次第に澄江から離れながら、澄江を蔑む多くの時間を、日々の友にするのであった。一途に憎む思いばかりが、自然であった。

恐らく澄江も、愛しつかれ、憎みつかれたに相違なかつ

た。そして澄江は故郷へ帰った。卓一は、風の便りに、それを知った。もはや四年の歳月が流れていた。二人は互るん音信を交したこともないのであった。

「野々宮さんも、若いですね」と、木村重吉という編輯部員が、新編輯長に親しみを見せたいために笑いながら、言った。「まるで、はたちの青年のように、恋にあつたんです。げつそりやつれてしまったのです。複雑な事情は知りませんが、僕達は、これを野々宮さんの深刻なる恋愛と称んでいるのです。あいにく事が奥さんにばれて、その方のもつれ方も、一通りではないそうですね」

仕事中の一人の編輯記者が、筆を握った手を休めずに、鼻唄のような呟きを洩らした。

「若いよ。とにかく、小説中の人物さ」

その野々宮は、窓際に茫然立って、外を見ていた。野々宮は三十八だった。そして卓一は三十だった。野々宮の後姿を眺めてすら、その衰えと、不健康のみ知り得ずにいられなかった。人生を鼻唄に換えて流れてきたのに、着任匆忙にやつれた人物にめぐりあうとは。すでに心が重かった。卓一は筆を措いて立ち上り、彼も亦窓に凭れて外を眺めた。下をこの市のメインストリートが走っている。人も自動車も動いているが、東京の生き生きとした賑いには、とうてい比ぶべくもない凋落の白さがみちていた。雪国の長い冬が、訪れよう